
原 著

乳幼児をもつ母親の育児不安と自我状態 — 乳児期と幼児期の比較を通じて —

山下 美 称

高松市保健所

要 旨 本研究の目的は、乳幼児を養育中の母親の育児不安について、児の発達段階（乳児と幼児）と母親の自我状態との関連性について明らかにし、育児不安の軽減をはじめとした、育児支援のあり方について検討することである。乳幼児を養育中の母親254名を対象に質問紙による「育児に関する意識調査」を実施し、225名の有効回答を得た。分析の結果、以下のことが明らかになった。1) 母親の育児不安は、乳児期よりも幼児期に強くなる。2) 育児不安と自我状態の関連では、育児不安が強い母親は、AC（順応した子どもの自我）のエネルギーが高く、ACに反応が偏り、他の自我が抑圧される傾向がみられた。基本的構えでは、「自己否定・他者肯定」「自他否定」の立場をとり、自分自身を肯定的にとらえられず自分に自信がないものと考えられた。

以上のことから、育児支援は、児の発達段階に応じた関わりと、母親が自分自身に自信が持てるような支援が重要である。

キーワード：育児不安、自我状態、母親

はじめに

育児中の母親を取り巻く環境は近年大きく変化しており、様々な要因が影響して育児不安など、育児を困難と感じている母親は増えている。1980年代には、育児不安という言葉が普及し、その要因についての研究が多く報告されている。育児不安の程度や内容の違いには、育児や育児中に起こる現象について、母親自身がどのようにとらえているかが影響している。そのとらえ方には、母親自身のパーソナリティや自我状態の与える影響が大きいと考えられる。

母性性に関する研究^{1,2)}によると、母性性を母親のパーソナリティの一部としており、母性性は自我状態のNP（養育的親）としている。また、自我状態は常に同じではなく、様々な生活状況によって影響を受けることから、育児中の母親の自我状態を知ること、育児不安の指標

になるのではないかと考えた。そして、パーソナリティを分析する方法としては、交流分析^{3~5)}における自我構造の分析が普及していることから、本研究では、母親のパーソナリティを、自我状態の発達をあらわすエゴグラムを用いることとした。

先行研究では、育児不安と母親の性格特性（パーソナリティ）との関連について、不安傾向が高い母親は育児不安が高いと⁶⁾報告されている。しかし、乳幼児をもつ母親の育児不安と自我状態との関連については、児の発達段階別に調査したものは見あたらなかった。

母親自身が育児中の自分自身をどのようにとらえているかについて、児の発達段階による影響も考慮し、自我状態から分析し明らかにすることは、乳幼児を養育中の母親への育児支援のあり方を検討する上で、意義が高いと考え本研究を行った。

目 的

児の発達段階（乳児と幼児）における、母親の自我状態の特徴を明らかにし、育児不安との関連について分析

2003年2月20日受理

別刷請求先：山下美称，〒760-0074 香川県高松市桜町一丁目9番12号 高松市保健所

する。

研究方法

1. 調査対象および期間

地方都市の乳幼児を養育中の母親254名を対象に、2001年7月～9月にかけて質問紙による「育児に関する意識調査」を実施した。乳児または幼児を養育中の母親を対象にしたのは、児の発達段階において、乳児と幼児では、児との相互作用の過程で母親の養育態度や意識に変化が生じると考えられるためである。また、2人以上の乳幼児をもつ母親については、末子の発達段階を調査の対象とした。

2. データ収集法

- 1) 質問紙、無記名自己記入法
- 2) プレテスト：2001年7月上旬にA市乳児相談に来所した乳幼児を養育中の母親14名を対象に、質問紙による「育児に関する意識調査」、および聞き取り調査を実施した。

3. 倫理的配慮

施設側には、調査依頼時に、調査目的、調査内容について説明し同意を得た。調査対象者には、口頭にて研究の主旨を説明し、納得し同意の得られた方に質問紙記入を依頼した。そして、「無記名にて実施すること。また、本調査は強制ではないため、回答しにくい質問項目については無記入でもよい。結果は研究目的以外には使用しない。」ことも追加した。

4. 調査内容

- 1) 質問項目は、基本的属性（母親自身の要因、乳幼児の要因、家族背景）、育児不安、自我状態である。

2) 用語の定義

- ①育児不安：子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした脅威を含む情緒の状態。日々の育児行為の中で生じる、持続し蓄積された不安の状態のことであり、無気力感や疲労感または、育児意欲の低下などの情緒や態度として行動に表出するものとした。
- ②自我状態：米国の精神科医 E. Berne によって創始された交流分析の基本的な考え方である、親的な自我 (P)、大人の自我 (A)、幼児的な自我 (C) が存在している。

自我状態とは、思考・感情・行動パターンを包括したものであり、「交流分析」の構造分析によって、人の行動パターンや性格傾向を分析する。

③基本的構え：自分と相手に対する基本的な構えを人生の立場と呼ぶ。基本的構えには、「自他肯定」「自己肯定・他者否定」「自己否定・他者肯定」「自他否定」の4つの立場がある（以下、自他肯定、自肯・他否、自否・他肯、自他否定とする）。自分がどの立場にいるのか、そして、相手がどの立場にいるのかを振り返ることで、お互いを理解して交流の問題点を探ることが可能になる。

3) 調査方法

①育児不安

母親の育児不安の測定には、牧野（1982）の育児不安測定尺度⁷⁾を用いた。牧野は育児に関する不安徴候として、一般的疲労感、一般的気力の低下、イライラの状態、育児不安徴候、育児意欲の低下の5つの特性を取り上げ、育児不安尺度を作成している。この尺度は疲労徴候を含んでいること、育児不安は母親自身の心身の疲労も影響があると考えられ、母親の育児不安を測定する指標として使用した。

質問紙は、5因子14項目から構成されており、ネガティブな意識の8項目とポジティブな意識6項目からなる。回答は、ネガティブな意識については、「よくある」を4点、「時々ある」3点、「ほとんどない」2点、「全くない」1点とし、ポジティブな意識についての項目は反転させて採点するため、得点範囲は14～56点となり、得点が高いほど育児不安が高いことを示す。当調査における育児不安尺度14項目の Chronbach α 係数は、0.76であった。

②自我状態

母親の自我状態の測定には、信頼性と妥当性をともに検証されている東大式エゴグラム（新版 TEG No815）⁴⁾を用いた。エゴグラムは、5つの自我尺度—CP (Critical Parent 批判的な親の自我)、NP (Nurturing Parent 養育的親の自我)、A (Adult 大人の自我)、FC (Free Child 自由な子どもの自我)、AC (Adapted Child 順応した子どもの自我状態)—からなり、それぞれの項目は10項目、各得点は0～2点で採点される。本研究では得点を、CP、NP、A、FC、ACの自我尺度の平均パーセントタイル値に換算した値から、乳幼児別に母親の自我状態のエゴグラムパターンを検討した。

③基本的構え

自我状態のエゴグラムパターンから、CP<NPを他者肯定、CP>NPを他者否定、FC>ACを自己肯定、FC<ACを自己否定。その結果から、「自他肯定」「自己肯定・他者否定」「自己否定・他者肯定」「自他否定」の4つの立場を検討した。

5. 分析方法

児の発達段階別に母親の育児不安と自我状態の関連について分析した。

育児不安と自我尺度との関連については、育児不安平均得点±1SDを基準にして、-1SD以下を低得点群、+1SD以上を高得点群、1SDの範囲内を中得点群とし3群に分け、自我状態との関連を分析した。

統計処理には、統計ソフトとしてHALBAU for Windows Version 5.1を用い解析した。有意水準は5%に設定した。

結 果

調査票の回収は239名(94.1%)であり、有効回答は225名(88.6%)であった。本調査では、この225名を分析の対象とした。児の平均年齢±SD(標準偏差)は、全体では14.8±14.2カ月、乳児群5.7±3.1カ月、幼児群29.7±12.8カ月であった。

1. 対象の属性(表1)

1) 母親の基礎的情報

①母親の平均年齢：乳幼児を養育中の母親225名中、乳児を養育中の母親(以下、乳児群)140名の平均年齢は30.7±3.7歳。幼児を養育中の母親(以下、幼児群)85名の平均年齢は30.8±3.8歳であった。

②母親の就業状況：就業している母親の割合は、225名中98名(43.6%)であったが、乳児群(33.6%)よりも、幼児群(60.0%)のほうが就業している母親の割合が高かった。

③母親の学歴：高校卒業までは75名(33.3%)、それ以上は150名(66.7%)であり、乳幼児群ともに、それ以上の割合が高かった。

④家族背景：核家族186名(82.7%)、複合家族39名(17.3%)と核家族が著しく多い。乳児群では、核家族が89.3%であるが、幼児群では71.8%であった。

表1. 対象の属性

人(%)

		乳児群 (n=140)	幼児群 (n=85)	全体 (n=225)
母親の平均年齢±SD(歳)		30.7±3.7	30.8±3.8	30.8±3.7
母親の就業状況	共働き	47(33.6)	51(60.0)	98(43.6)
	専業主婦	93(66.4)	34(40.0)	127(56.4)
母親の学歴	高校卒業まで	43(30.7)	32(37.6)	75(33.3)
	それ以上	97(69.3)	53(62.4)	150(66.7)
児の平均年齢±SD(ヶ月)		5.7±3.1	29.7±12.8	14.8±14.2
児の出生順位	第1子	88(62.9)	45(52.9)	133(59.1)
	第2子以上	52(37.1)	40(47.1)	92(40.9)
家族形態	核家族	125(89.3)	61(71.8)	186(82.7)
	複合家族	15(10.7)	24(28.2)	39(17.3)
児の育てやすさ	手がかからない	17(12.1)	15(17.6)	32(14.2)
	ふつう	80(57.1)	55(64.7)	135(60.0)
	手がかかる	43(30.7)	15(17.6)	58(25.8)

2) 児の基礎的情報

①児の出生順位：第1子が133名(59.1%)、第2子以上が92名(40.9%)であった。乳児群(62.9%)のほうが、第1子の占める割合が幼児群(52.9%)に比べて高かった。

②児の育てやすさ：「手がかからない」は32名(14.2%)、「ふつう」は135名(60.0%)、「手がかかる」は58名(25.8%)であった。「手がかかる」では、乳児群(30.7%)が幼児群(17.6%)に比べて多かった。

2. 乳幼児をもつ母親の育児不安

1) 育児不安の得点分布(図1)

乳幼児全体の育児不安得点は、23~49点までの間に分布し、平均値34.9±4.7点であった。乳児群の育児不安得点は、23~47点までの間に分布し、平均値34.4±4.5点であった。幼児群の育児不安得点は、25~49点の間に分布しており、平均値は35.8±4.8点であった。

2) 育児不安因子別・群別平均得点(表2)

乳児群と幼児群の各因子間の平均得点では、5因子のうち、「気力の低下」の因子以外は幼児群の平均得点が高かった。有意差がみられた因子は「イライラの状態」であり、幼児群が乳児群に比べて有意に高かった(p<0.001)。合計平均得点についても有意差がみられ、幼児群が乳児群に比べて得点が高かった(p<0.05)。

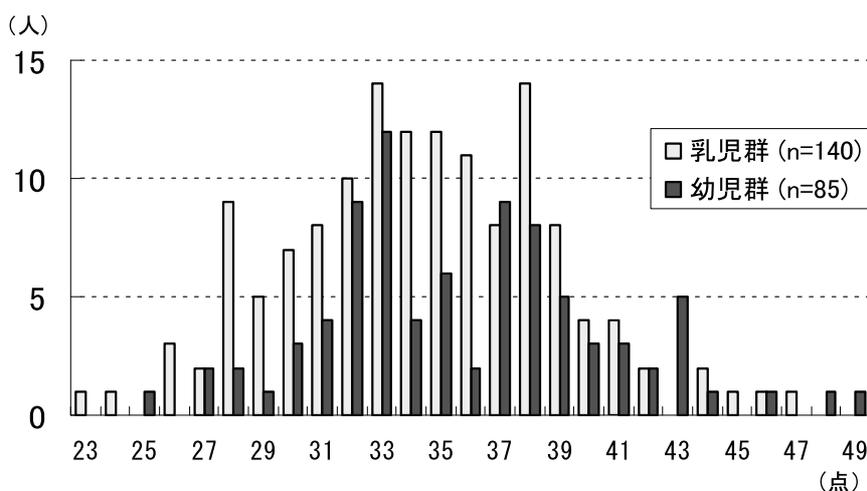


図1. 育児不安得点度数分布

表2. 育児不安因子別・群別平均得点 (点±SD)

	乳児群 (n=140)	幼児群 (n=85)	全体 (n=225)	乳幼児間の有意差
疲労感 (2項目)	5.4±1.1	5.6±1.0	5.4±1.1	
気力の低下 (2項目)	5.2±0.9	5.1±1.0	5.1±1.0	
イライラの状態 (2項目)	4.6±1.3	5.2±1.1	4.8±1.3	***
育児不安徴候 (4項目)	10.3±1.6	10.7±1.7	10.4±1.7	
育児意欲の低下 (4項目)	9.0±2.0	9.3±2.2	9.1±2.1	
合計 (14項目)	34.4±4.5	35.8±4.8	34.9±4.7	*

t検定 *p<0.05 ***p<0.001

3. 育児不安と自我状態の関連

1) 育児不安とエゴグラムパターン

①乳幼児全体について (図2)

育児不安の低得点群では、パーセンタイル値の高い順に、FC, A, NP, CP, ACであり、高いFC (85%以上) と低いAC (30%以下) が特徴的なFC優位のAC低位型であった。中得点群では、FC, CP, AC, NP, Aの順であり、その中でもFCがどの値よりも高く、若干Aが低い逆N型であった。高得点群では、AC, FC, A, NP, CPの順でAC優位のCP低位型を示した。

全体では、低得点群のそれぞれの自我尺度のパーセンタイル値は、ACを除いて中得点群、高得点群のどの自我尺度よりも高い傾向があり、育児不安得点が高くなるにつれてパーセンタイル値が低くなる傾向がみられた。反対に、AC尺度については、育児不安が高くなるにつれてパーセンタイル値も高くなる傾向がみられた。

②乳児群について (図3)

低得点群では、パーセンタイル値の高い順に、FC, A, NP, CP, ACであり、高いFC (85%) と低いAC (25%) を示すFC優位のAC低位型であった。中得点群では、FC, AC, CP, NP, Aの順であり、FCが高く、Aの低い逆N型を示した。高得点群では、AC, FC, A, CP, NPの順で、AC優位のNP低位型であった。育児不安得点が高いほど、ACを除き、それぞれの自我尺度のパーセンタイル値が低くなる傾向がみられた。

③幼児群について (図4)

低得点群では、パーセンタイル値の高い順に、FC, NP, A, CP, ACであり、FCとNPが75%以上のM型であった。中得点群では、AC, FC, A, NP, CPの順であった。高得点群では、AC, NP, A, CP, FCの順であり、ACが高く、FCの低いN型であった。低得点群のそれぞれの自我尺度のパーセンタイル値がACを除いて、中・高得点群のどの自我尺度よりも高く、ACは、育児不安得点が高くなるにつれてパーセンタイル値が低くなる傾向がみられた。

2) 育児不安と自我状態の平均値との関係

3群に分けた育児不安得点と各自我得点の平均得点との関係を表3に示した。

乳幼児全体では、育児不安の高低により有意差を認める自我尺度は、CPとNP, FC, ACであった。特にFCとACにおいては、低得点群と中得点群、低得点群と高得点群に有意差 (p<0.01) がみられた。CP, NP, FC

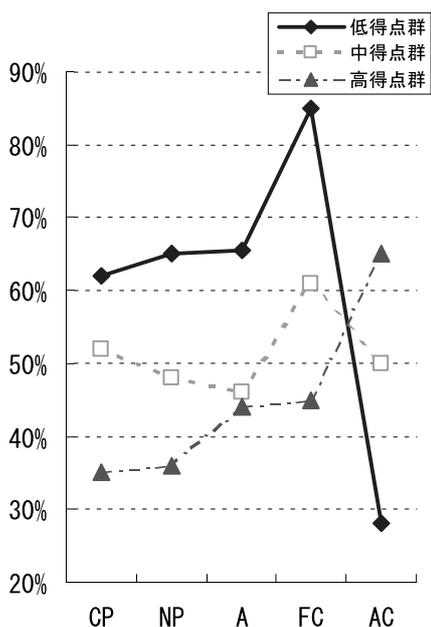


図2. 育児不安とエゴグラム (全体)

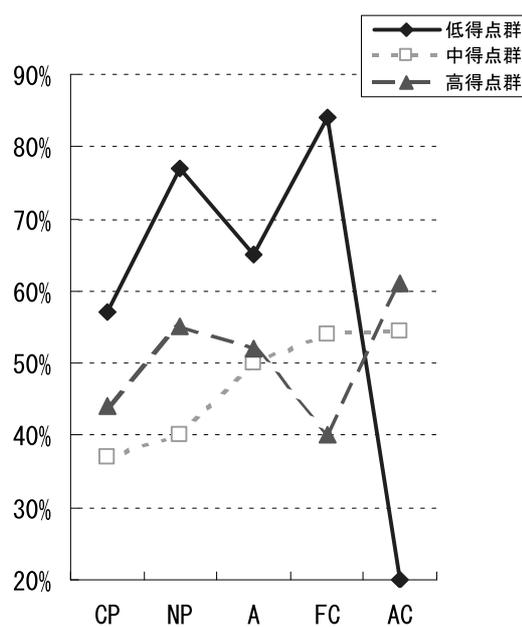


図4. 育児不安とエゴグラム (幼児群)

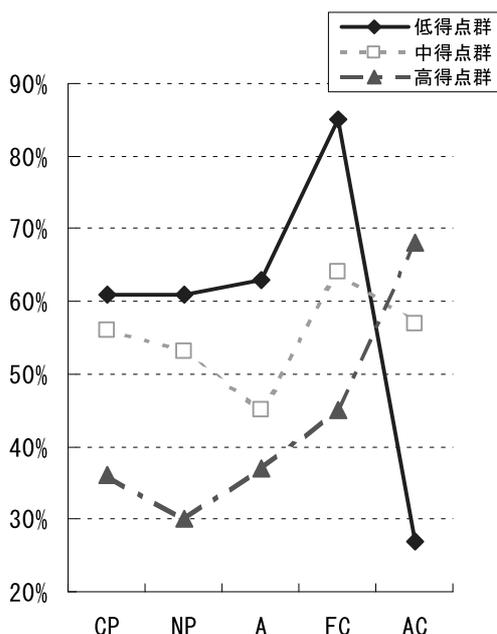


図3. 育児不安とエゴグラム (乳児群)

では、低得点群の得点が高く、ACは高得点群の得点が高かった。

乳児群では、NPにおいて、低得点群と高得点群 ($p < 0.01$)、中得点群と高得点群 ($p < 0.05$) に有意差がみられた。FCでは、低得点群と高得点群 ($p < 0.01$)、ACでは、低得点群と中得点群 ($p < 0.05$)、低得点群と高得点群に有意差 ($p < 0.01$) がみられた。NP、FCは低

得点群の得点が高く、反対にACは高得点群の得点が高くなった。

幼児群では、NPにおいて、低得点群と中得点群 ($p < 0.01$)、FCでは、低得点群と中得点群 ($p < 0.05$)、低得点群と高得点群に有意差 ($p < 0.01$) がみられた。ACでは、低得点群と中得点群 ($p < 0.01$)、低得点群と高得点群に有意差 ($p < 0.01$) がみられた。

幼児群でも乳児群と同様にNP、FCは低得点群の得点が高く、反対にACは高得点群の得点が高くなっていった。

4. 育児不安得点と基本的構えの関係

育児不安得点と基本的構えの関係について、2群毎に χ^2 検定を行った結果を図5に示す。

乳幼児全体では、自他肯定と自否・他肯 ($p < 0.01$)、自他肯定と自他否定 ($p < 0.001$)、自肯・他否と自否・他肯 ($p < 0.05$)、自肯・他否と自他否定 ($p < 0.01$) で有意差がみられた。乳幼児全体では、自他肯定の割合が低得点群では高く、高得点群では低くなり、高得点群では自否・他肯、自他否定の割合が高くなる傾向がみられた。

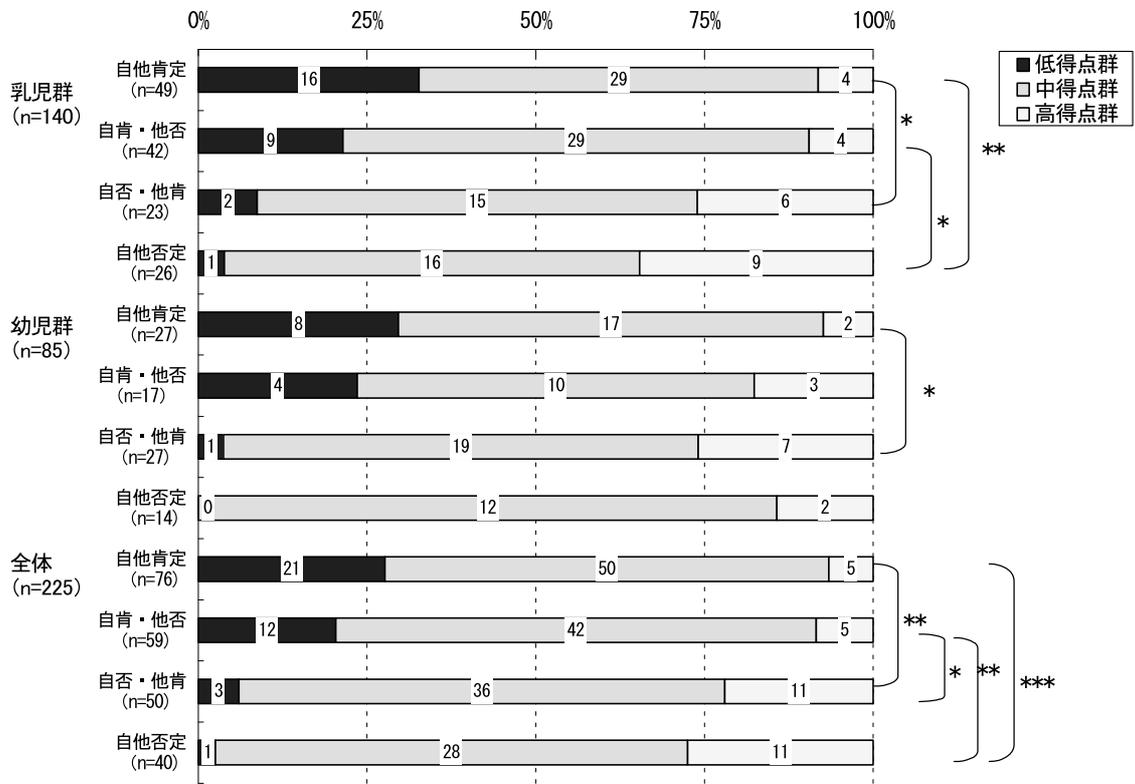
乳児群では、自他肯定と自否・他肯 ($p < 0.05$)、自肯・他否と自他否定 ($p < 0.05$)、自他肯定と自他否定 ($p < 0.01$) の間に有意差がみられた。乳児群では、自他肯定と自肯・他否の割合が低得点群では高く、高得点

表3. 育児不安と自我状態

(点±SD)

		CP	NP	A	FC	AC
		平均得点±SD	平均得点±SD	平均得点±SD	平均得点±SD	平均得点±SD
乳 児 群	低得点群 (n=23)	10.0±4.4	15.0±4.1	10.3±4.9	16.4±2.7	6.1±4.0
	中得点群 (n=89)	9.8±4.5	14.1±4.1	8.7±4.1	13.7±4.2	8.7±4.3
	高得点群 (n=28)	7.9±4.2	11.4±3.6	7.8±3.9	11.4±5.1	11.0±5.0
幼 児 群	低得点群 (n=14)	9.8±3.9	16.6±3.1	10.8±4.1	16.2±3.4	5.0±3.3
	中得点群 (n=58)	7.7±3.5	12.9±3.7	9.0±4.1	12.7±4.3	9.6±4.0
	高得点群 (n=13)	8.4±3.3	14.4±3.3	9.2±4.2	10.9±3.4	10.1±5.5
全 体	低得点群 (n=32)	10.1±4.2	15.3±4.1	10.5±4.7	16.4±2.9	5.9±3.9
	中得点群 (n=156)	9.0±4.4	13.6±4.0	8.8±4.1	13.2±4.4	9.0±4.3
	高得点群 (n=37)	7.6±3.1	12.6±3.4	8.6±3.8	11.5±4.2	10.8±5.0

一元配置分散分析 (Bonferroni 法) *p<0.05 **p<0.01



2群毎に χ^2 検定 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

図5 育児不安と基本的構え

群では自否・他肯，自他否定の割合が高くなる傾向がみられた。

幼児群では，自他肯定と自否・他肯 ($p < 0.05$) で有意差がみられた。幼児群では，自他肯定の割合が低得点群では高く，高得点群では，低い傾向がみられた。自否・他肯では，低得点群の割合は低いが，高得点群では，半数 (50%) を占めていた。

考 察

自我状態は，特に問題がない場合は，それなりにまとまった機能をする。しかし，何か問題が起こると，自我状態のなかで反応に変化がみられ，ある自我状態が強く反応したり，反対にある自我状態の反応が低下したりすることがある。今回の結果では，乳幼児群ともに育児不安の程度によって自我尺度の平均得点と自我状態のパターン，そして基本的構えに有意差がみられた。

育児不安の高い母親の自我は，ACが有意に高い傾向がみられた。ACが高いことは，他人によく思われたい気持ちや依存心が強いといわれている。末松ら⁸⁾の研究によると，AC優位の人には，①自分の判断で行動することが難しい，②自分に自信が持てず，結果を気にするあまり，何も行動が起こせなくなる，③外見はおとなしそうで，寡黙なため，精神エネルギーが低いように思われるが，内的にはかなり思い悩む，④消極的で自己主張できないため，自己実現が難しいとされている。これを育児中の母親にあてはめると，育児に対して熱心になりすぎて，自分の出来ていないところを探したり，たくさんの情報や他人の言うことに左右され，ますます育児不安を増強させてしまうことにつながる。

育児不安の低い母親は，FCが高く，育児不安の高い母親はFCが低得点群と比較し有意に低くなっている。FCが低いことは自己主張ができない他者依存タイプといわれる。この状態では，他人の目を意識しすぎて自分の自然な感情を必要以上に抑圧している。育児によって自分の時間が持てず，育児に熱心になるあまり，自由に遊ぶことも困難になり，ストレスを発散させる場面が減少しているためであると考えられる。育児不安の高い母親はFCが低くACが高い状態であり，ストレスをためやすい状況にあるため，育児不安得点が高くなったと考えられる。

育児不安と自我パターンの関連では，全体的に育児不安が高い母親は，それぞれの自我尺度のパーセンタイル

値が低く，ACのみが他の自我尺度よりも高い傾向がみられた。このことは，育児不安の高い母親はACが行動パターンの主役を担っており，育児という現象によってACに反応がかたより，他の自我エネルギーが使われていない状況である。このパターンは，心身症の人によくみられるパターンでもある⁵⁾。育児不安の高い母親にとって育児は精神的にも大きな影響を与えており，育児不安として自覚される母親の自我状態には，ACが大きく関与している。これらの結果から，育児不安と自我状態とは関連があることを示しており，エゴグラムは，母親の育児不安の状態を予測する手がかりになると考えられる。

基本的構えと育児不安の関連では，母親自身が自己を肯定的にとらえることができる人の育児不安が低かった。加藤ら⁹⁾が，育児を肯定的にとらえる人において低ストレスを示した。と述べているように，自己を高く評価する人が，育児満足が高くなっている。そして，自分に自信をもつことや肯定感を持つことは，育児中の母親にとって重要なことである。今回の結果も，育児不安の低い母親は，自他ともに肯定的にとらえる傾向がみられたが，育児不安が高い母親の基本的構えは，自己否定的な構えの占める割合が高くなる傾向がみられた。育児不安の高い母親は，自己を否定的にとらえる傾向が強く，自分の育児に自信がないと思いながら育児をしている状況である。この状態では，劣等感や無気力感を伴いやすいため，子どもや家族との暖かい交流が保ちにくい状況にあると考えられる。そして，育児不安の高い母親は，他者否定の傾向も高く，他者との間での温かい人間関係が保ちにくい状況でもある。自分自身だけでなく，他者も受け入れることができない状況は，ますます育児不安を増強させると考えられる。育児中の母親の基本的構えを十分に考慮した上で，支援していく必要がある。たとえば母親が，自他共に否定的な立場にいる時に，母親が支援者を受け入れる準備ができていない状態で，支援者が認知面を強化するような指導を行ったとしても，かえって悪循環を引き起こしてしまいかねない。育児不安が強い母親の基本的構えを知ることにより，母親の立場をまず理解して，母親の状況に応じた情緒的な支援や自己肯定感を持たせるような支援を行っていく必要がある。

以上の結果から，育児不安と自我状態の間には関連がみられ，育児不安の強い母親は，自分自身を肯定的にとらえていないこと，自分に自信がないことが明らかになった。育児不安には，様々な要因が影響しているが，

母親が自分自身をどのようにとらえているのかについても大きな要因と考えられる。今後、育児中の母親が自分自身を肯定的にとらえることができ、母親が自分自身の育児に自信がもてるような支援が必要である。

研究の限界および今後の課題

本研究は、限られた期間に限られた施設の母親を対象に実施したこと、また、対象となる乳幼児の対象数や基本的属性に差があることから、今回の結果を一般化するには限界があり、一般化には十分な考慮が必要となる。今後、児の発達段階が母親の育児不安や自我状態に与える影響についてさらに詳しく検討するために、縦断的に追跡していくことが課題である。さらに、本研究では、母親の育児不安に影響を与える夫の父親役割を実際にどの程度、遂行しているかについてまでは問題にしていなかった。親役割の遂行には家族全員を巻き込んだものである限り、母親と子どもに関する変数を十分に考慮して、夫を含めた家族についての研究も今後の課題としたい。

まとめ

今回の調査結果から、乳幼児をもつ母親の育児不安と自我状態との関連について、以下の結果が得られた。

1. 育児不安の強い母親は、ACが有意に高く、ACに反応が偏り、他の自我が抑圧される傾向がみられた。
2. 基本的構えでは、育児不安の強い母親は、自己を肯定的にとらえられず、そして、他者に対しても否定的な構えとなる傾向がみられ、自分に自信がないものと考えられた。

以上のことから、育児支援には、母親が自分自身を肯定的にとらえることができ、育児に自信が持てるような支援が重要である。

謝 辞

最後に、本研究にご協力いただきました母親の皆様に、また、本調査の実施にあたり、ご協力、ご助言いただきました施設の皆さまに深謝します。

文 献

- 1) 石崎優子, 織田正昭, 日暮眞: 幼稚園児を持つ母親の母性性の意識と行動に関する研究(第1報) - 自我状態から見た母性性の特性 -, 小児保健研究, 56(1), 34-42, 1997.
- 2) 石崎優子, 織田正昭, 日暮眞: 幼稚園児を持つ母親の母性性の意識と行動に関する研究(第2報) - 母親の年齢, 就業, 家族形態, 子どもに関する悩みとの関連 -, 小児保健研究, 56(1), 43-48, 1997.
- 3) 池見西次郎, 杉田峰康: セルフコントロール - 交流分析の実際 -, 創元社, 1998.
- 4) 東京大学医学部診療内科TEG研究会 編: 新版TEG解説とエゴグラム・パターン, 金子書房, 2002.
- 5) 杉田峰康: 講座サイコセラピー 交流分析, 日本文化科学社, 1985.
- 6) 佐々木英子, 清水凡生: 乳児をもつ母親の育児不安について, 小児保健研究, 45(3), 290-293, 1986.
- 7) 牧野カツコ: <育児不安>の概念とその影響要因についての再検討, 家庭教育研究所紀要, No10, 23-31, 1989.
- 8) 末松弘行, 野村忍, 俵里英子 他: エゴグラムパターン, 金子書房, 1989.
- 9) 加藤道代, 津田千鶴: 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討, 小児保健研究, 57(3), 433-440, 1998.

*Childcare anxiety and ego states of mothers-comparison
between infancy and preschool childhood*

Miya Yamashita

Department of Takamatsu Public Health Center, Kagawa, Japan

Abstract The purpose of the present study was to analyze mothers' childcare anxiety and ego states in different stages of child development and consider better childcare support including relief from such anxiety. A questionnaire survey was conducted on 254 mothers of children and 225 returned valid answers. Findings are as follows. (1) Childcare anxiety of mothers with preschool children (age of 1-6 years) was stronger than those of their infants (age of 0-11 months). (2) As to the relation between childcare anxiety and ego states, mothers with strong anxiety had strong AC (adapted child) energy, with predominance of AC and suppression of other ego states; therefore, they could not take themselves affirmatively and hence lost confidence in their-selves.

Accordingly, mothers need childcare support of the natures which are suitable for children's development, and assistance to recover self-confidence.

Key words : childcare anxiety, ego states, mother